



連載

常陸時代の佐竹氏 — 500 年の軌跡を追う —

「五本骨扇に月丸」
の佐竹氏家紋

【第20回】

名護屋在陣と加速する金山開採

1 水戸市有賀町の 「有賀金山跡」

茨城県水戸市加倉井町付近から車で国道50号を同県笠間市方面に向かうと、進行右手の水田奥に山並みがうっすらとみえる。八溝山地である。「エッ、ヤミゾサン?」といぶかるかもしれない。八溝山地は福島県東白川郡棚倉町の八溝山北側山麓から茨城県北部を経てつくば市の筑波山まで続いている。同山地の主峰・八溝山（標高1022[㍎]）は古代から黄金を産出する山として有名である。

国道50号は水戸市大足町^{おおだらちょう}で旧50号と接続する。山並みに近づくと旧50号の水戸市中原町、「中原交差点」を右折し、県道52号（石岡城里線）を城里方面へ進む。「有賀神社」の看板が立つ付近で左折し、「かたくりの里公園」を目指す。道沿いに桜川が流れている。同公園は「カタクリ」の群生地として知られている。目当ての説明板は山を背にして立っていた。全文は以下の通り。

「有賀金山跡 今からおよそ400年前の天正年間、常陸の雄佐竹義宣は豊臣秀吉の命を受け領内各地で金の採掘を行った。当時の記録によると佐竹領の金の産出量は全国三位を誇ったという。近在では木葉下金山、田島金山洞、有賀金井峠、杉崎金山等の地名が残っており、ここを含めてかなり広範囲に金の採掘がおこなわれたものと思われる。平成十七年二月 水戸市水戸市教育委員会」

2 江戸氏の旧領 「中妻三十三郷」

「有賀金山跡」の説明板に書かれた「近在の金山」は水戸市木葉下町の「木葉下金山」を含めすべて水戸市内の西部地区にある。産金が始まった時期は「天正年間（1573—92）」とある。開発者は佐竹氏20代当主義宣^{よしのぶ}。「豊臣秀吉の命

を受け領内各地で金の採掘を行った」という。この記述から有賀金山を含む記載された5つの金山はこの時期、すべて義宣の「領内」にあったことがわかる。

5つの金山の所在地は町名でみると、木葉下町、田島町、有賀町、杉崎町と接している。しかも、地形的にみると茨城県東茨城郡城里町方面から同県笠間市に伸びる八溝山地の一角にあたる。これらの地域は義宣が「領内」とする以前は、水戸城（茨城県水戸市）を居城として主に那珂川右岸沿いに勢力を張った江戸氏の支配地だった。中でも5つの金山跡が残るこの地域は「中妻三十三郷」といわれ、江戸氏領内でも特に重要視されていた。

義宣は天正18年（1590）12月、水戸城を攻め、落城させた。城主の江戸重通は結城氏を頼って落ち延び、江戸氏の時代は終わった。さらに府中城（茨城県石岡市）の大掾氏、鹿行地域の「南方三十三館」の諸氏を滅ぼした。常陸国を統一した義宣は、豊臣政権下で有力大名となった。半面、秀吉からの軍勢動員数も増えた。その費用負担から佐竹氏は八溝山地沿いの「中妻三十三郷」に注目したと考えられる。

3 奥州出陣と朝鮮出兵命令

義宣は常陸国の領内治政の拠点を水戸城と定めた。しかし、同城の整備を進める間もなく秀吉からの軍役が相次いだ。天正19年（1591）6月、秀吉から関東・奥州の有力武将に奥州への派遣命令が下った。東奥の南部氏の家督相続をめぐる一族の九戸政実^{くのへまさざね}が反乱を起こしたのである。義宣に対する動員数は「2万5千人」（『水戸市史』（上巻））だった。かなりの数の割当てである。

九戸氏の反乱は鎮圧された。ところが、奥州から帰陣中の各武将が安堵する間もなく秀吉から驚きの命令が発せられた。『佐竹家譜』（「義宣の項」）は天正19年10月（日付けなし＝筆者）

の条に次の一文がある。「秀吉公命じて曰く、朝鮮渡海の為其兵三千を率いて名護屋在陣すべし」。何と朝鮮へ出兵するから名護屋（佐賀県唐津市鎮西町）に3千人の兵を連れて参れ、という命令である。

名護屋は日本海に面した佐賀県の東松浦半島にある。秀吉は同半島北端の波戸岬に名護屋城を築き、朝鮮出兵の拠点とした。天下を統一した秀吉は全国の大名に同様の命令を出した。義宣は相馬義胤、蘆名義広や佐竹一門の東義久、石塚義辰、大山義則、戸村義和ら重臣を引き連れ、文禄元年（1592）4月、名護屋へ到着。佐賀県教育委員会がまとめた『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」10』によると、義宣は島津義広や蜂須賀家政、相馬義胤らと円を囲むように陣を置いている。

4 名護屋滞陣、1年半余

義宣の名護屋滞在は1年半余に及んだ。『佐竹家譜』（「同」）の文禄2年（1593）8月15日の条に「義宣名護屋を発して帰陣。今日浜窪に至る（行程10里）」とある。名護屋から浜窪（福岡県糸島市）まで「10里（約40キロ）」。前日あたりに出発したのであろうか。義宣は前年の4月に着陣しているので帰陣日から逆算すると、1年半余にわたって「家臣3千人」とともに名護屋に滞在したことになる。

水戸城到着は10月6日。名護屋から水戸城まで約2カ月かかっている。往復すると約4カ月。滞在期間の1年半余に往復の月数を加えると、1年10カ月に達する。戦う相手は朝鮮の兵。佐竹軍に対する渡海命令は文禄2年5月、石田三成から義宣に伝達された。『佐竹家譜』（「同」）は同年6月14日の条に「東義久」、同月15日の条に「真崎宣宗、小貫頼」、同月18日の条に「穴戸氏朝」を載せ、それぞれ「朝鮮渡海」とある。

翌月に入っても家臣の渡海は続いた。しかし、義宣本人は『佐竹家譜』（「同」）7月7日の条に「石田正澄、長束正家命を奉て使を義宣に遣して曰く、もくその城を抜て」（以下略）」と現地の情勢が高麗から届いたとし、「因て義宣朝鮮渡海に及ばず」と告げられた。家臣たちはかつてない経験をし、朝鮮から帰陣した。この遠征は佐竹軍に多大な負担を強いた。義宣が滞在中の費用捻出のため国許に出した書状にそれが端的に表れている。

5 加速した金山開発

義宣は名護屋滞在中、国許の宿老和田昭為に頻繁に書状を出している。『佐竹家譜』（「同」）は名護屋に着陣して1カ月後、文禄元年5月8日の条で次のように記している。「此度は皆以手元へあつめ候て金をのぼせ可候」と。領内で採掘した金はもとより年貢も金に換えて手元に集め早急に送れと催促している。

こうした状況を『水戸市史』（上巻）は「軍事物資の直送より、黄金の送付が望まれたのは当然である」とし、「金の需要はこのような大規模な遠征の間に著しく増大したのであって、佐竹領金山の開発はまことに目覚ましいものであった」と述べている。佐竹氏の金山開発は9代義舜以来「奥七郡」内の八溝山地と阿武隈山地を中心に進められてきた。それがこの朝鮮出兵という空前の軍事行動で一気に加速した。

水戸市杉崎町に八幡神社がある。『内原町史』は「天正年間佐竹義宣により本社を再建する。本殿棟木に佐竹氏の定紋五本骨の旭扇を付す」と記す。そのうえで「佐竹の勢力が八幡神社を中心に勢力を拡大したことが理解できる」という。佐竹領となった「中妻三十三郷」でも産金地を求め「山師」たちは歩き回ったことであろう。今に残る木葉下、田島、有賀、杉崎の各金山跡はそれを雄弁に物語っている。

歴史ジャーナリスト
茨城県郷土文化研究会会長
富山 章一



看板左手奥の山の斜面に今は木々に覆われてみえないが、金山跡の坑口がある＝水戸市有賀町、「かたくりの里公園」